

「新安船」を活用した中世東アジア海域交流史の教育方法論

鄭淳一(高麗大学歴史教育科、副教授)

=====
【要旨】

本講演は、14 世紀の海底沈没船としてよく知られる「新安船」についての新たな研究成果および知見に基づき、東アジア海域交流史の叙述方法と教授・学習方法を模索することを目的にする。新しい史・資料を活用した歴史学研究と歴史教育とを結び付き、「一国史」あるいは「自国史」を乗り越えた形としての「東アジア史」叙述や教育の方案を探り、一つのモデルとして提案したいと考えている。

=====
【講演の概要】

本講演は、14 世紀の海底沈没船としてよく知られる「新安船」についての新たな研究成果および知見に基づき、東アジア海域交流史の叙述方法と教授・学習方法を模索することを目的にする。新しい史資料を活用した歴史学研究と歴史教育とを結び付き、「一国史」あるいは「自国史」を乗り越えた形としての「東アジア史」叙述や教育の方案を探り、一つのモデルとして提案したいと考えている。以下、講演のタイトルを成している三つのキーワードを用いて発信したいメッセージについて述べたい。

最初のキーワードである「新安船」とは、韓半島の西南地域の沖から引き揚げられた海底沈没船のことである。1323年(または1330年初め頃)、1隻の船が中国の寧波(慶元、明州)を出航し、九州の博多(福岡)へ向かう途中、何らかの事情で現在の韓国・全羅南道新安郡知島面甑島の沖に沈没したのだが、その船が発掘後、「新安船」と命名されたのである。1976年10月～1984年9月の9年間11回にわたって、文化財管理局による調査が行なわれ、2万点以上の高級磁器、約30万トンに至る銅銭(約800万個)など、様々な金属遺物および木簡などが確認された。まさに文化人類史上の偉大なる出来事とも言えよう。出水遺物は、現在、韓国の国立中央博物館(ソウル)、国立光州博物館(光州)、国立海洋文化財研究所(木浦)にそれぞれ分けられ、所蔵あるいは展示されている。この船が注目を集めている理由は数多く存在するが、その一つが「至治三年」(西暦では1323年)の文字列をもつ木簡が同伴検出されたからである。一緒に引き揚げられた漆器に書かれている「辛未」の字が西暦1331年を指す可能性もあり、沈没年代を断定することは難しいが、少なくとも1330年代初め頃沈んだ船とみて大きな誤りはないと判断される。このように時期をある程度特定できることから、「新安船」の資料的価値が認められるのである。

興味深いのは、この「新安船」から検出された文字資料に多数の木簡が含まれているが、そこに「東福寺」「筥崎宮」「釣寂庵」(承天寺の塔頭)など日本の寺院名・神社名が見られることである。「新安船」は中国の港町を出発し、博多に向かったのではあるが、積載された荷物の最終目的地の一つとして京都所在の「東福寺」も想定できるからである。「筥崎奉加銭教仙 勸進聖」という文字列をもつ木簡の存在からは、「教仙」という僧侶が「銭」を「勸進」と

して「筥崎宮(神社)」に「奉」った形跡が見て取れる。つまり「新安船」の運営や国際交易に僧侶または寺社集団らが何らかの形で関与していたことになる。

一方、木簡には「いや二郎」「衛門次郎」「八郎」「菊一」「道阿弥」「又七」などのように日本人名として認められる文字列も確認される。「綱司私」も登場する。「東福寺」に関しては、「東福寺公用」「東福寺公物」などの墨書が書かれている。ここからは、日本の商人集団との関わりも想定できる。「綱司」または「綱首」というのは、商人ネットワークの代表的な人物を指す。また、彼らは性格の面からずれば「船頭」兼「商人」でもあるため、造船、運輸、貿易などにも従事する者たちが存在したとも解釈できる。

そこから二つ目のキーワードで「中世東アジア海域交流史」という用語の有効性が浮かび上がる。ここでの「中世」とは、具体的に 14 世紀頃のことを指す。私はこれまで主に 9 世紀頃の東アジア海域史に関する研究を発信してきたが、なぜ 14 世紀に注目するかとすれば、「9～14 世紀」という時期を一括りにして説明できることがあるからだ。その中核は人々の活発な国際移動である。勿論、ヒトが国境を超える行為自体は古くから確認でき、まったく新しいこととは言えない側面もある。ただし、王権以外の勢力・集団・個人が周辺諸国を頻りに行き来した事例は 9 世紀以前にはなく、9 世紀頃から現れ始めた新局面である。「9 世紀」をそれ以前と区別させるところでもある。その一方、「14 世紀」はその「9 世紀」的な現象が終焉を告げるもう一つの画期になる。嘗て榎本渉氏が「9～14 世紀」の東シナ海に注目したのも当該時期が持つ共通性、すなわち、使者でなく、国際商人(海商)や僧侶たちが主な交流の担い手として活躍する時代という同質性・連続性が認められるからであろう。一方、韓国の学界では、「新安船」の性格について単に「中国の船」と決め付けているような印象が強い。しかし、そこから検出されているモノが語ることは、それよりも寧ろ当時の列島社会における史的展開と密接に関わっている事象である。それは日本の学界が積極的に発信している海域アジア史分野の研究成果を知らずには論じることにも困難である。なぜ 14 世紀の東シナ海を「新安船」のような船が行き来するようになったのか、または、その運営の主体は誰であったのか、さらに、そのような形での国際交流を促した内外の事情とは何だったのかを考察するためには、膨大に蓄積されている日本史研究についての理解を深めていかなければならないのである。「寺社造営料唐船」に関する考察もその一環として必要である。ただし、14 世紀という時期に「東福寺」が貿易に関わっていることから、北条氏をはじめとする鎌倉地域の諸勢力だけでなく、京都在住の勢力・集団も考慮しなければいけない。例えば、後醍醐天皇の存在が留意される。さらに、後醍醐天皇をはじめ、京都の寺社勢力と国際貿易との関わりも解明すべきことである。

次いで、三つ目のキーワード「教育方法論」について述べておきたい。ここでいう「教育」とは「歴史教育」のことである。「新安船」という海底沈没船の実物が韓国にあるからなのか、韓国の歴史教科書には既に「新安船」に関する内容が記されている。現行の中学校『歴史②』や高等学校『韓国史』教科書のなかで教授・学習資料として取り上げられているのである。しかし、叙述の脈絡が全く説明されておらず、単に「高麗の活発な対外交流」項目のなかで紹介されるだけで「高麗」と「新安船」とがどのように連動するのかが捉え難くなっている状態である。これは「新安船」が 14 世紀の東アジア海域における国際交流を示す資料とし

て大きな意義をもつということまでは認識できているものの、そのコンテンツをどう生かしたら良いのかについての具体的な教授・学習方法の構築には至っていないことを意味するものと考えられる。それで、これからは、良いコンテンツを教育学的に活用する方法論の模索が要求されると言えよう。

その時、私の専門分野・教育分野での経験は役立つと思われる。私は、国立海洋文化財研究所の「新安船」関連の常設展示改編に諮問委員として携わったことがある。また、韓国の政府(教育部)から依頼を受け、国家レベルの歴史科教育課程および教科書執筆基準(日本でいう学習指導要領に相当)開発研究を行なったこともある。この二つの経歴をよく生かし、「新安船」関連遺物の意義を海域交流史の脈絡で教育学の観点から説明していきたい。単に「韓国」「高麗」と関係がある海底沈没船として位置づけるのではなく、また、叙述の主語を「自国」「一国」に限らせるのではなく、まさに「東アジア史」「世界史」の一部として理解できるような歴史叙述を構想してみたい。

なお、「新安船」に関する諸情報が日本の学界に十分共有できていないように見える。私が持っている博物館・文化財研究所のネットワークを通じて日本の研究者グループにも最新情報を提供し、本格的に共同研究を行ないたいと考えている。